

26T-am10S

伝統的薬用芍薬の潜在的資源探査

○中村 朝実¹, 高浦 佳代子^{1,5}, 松野 倫代², 後藤 一寿³, 川嶋 浩樹³, 山岡 傳一郎⁴, 高橋 京子^{1,5} (¹ 阪大院薬, ² 牧野植物園, ³ 農研機構, ⁴ 愛媛県立中央病院, ⁵ 阪大博)

【背景・目的】資源小国・日本において漢方薬原料生薬の安定供給を実現するには生薬自給率の向上が不可欠だが、経済性優先の輸入依存体質に加え既存の国内生薬栽培地の衰退による栽培技術・地域に適した種苗の消失などが栽培再開の障壁となっている。本研究では、日本東洋医学会生薬原料委員会調査報告に基づき漢方医による湯液用生薬使用動向(kg/年)で高いニーズが示された芍薬(PAEONIAE RADIX, シャクヤク:*Paeonia lactiflora* Pallas)について日本古来の篤農技術や品種・系統の現況及び形態比較調査を目的とした。【方法】近現代の本草・農業関連文書48件以上を悉皆調査対象とし、結果をリスト化・解析した。栽培地の系統品種調査は、奈良県・田村薬品工業(株)、同福田商店、香川県・農研機構西日本農業研究センター及び富山県薬用植物指導センター協力の下、主要品種計29種の外部形態記録及び材料採取を行った。【結果・考察】大和地方を中心とした畿内古文書・記録・図譜の解析及び篤農家への取材調査から、江戸期に徳川吉宗が展開した薬草政策以降国内で育種された大和芍薬(通称)のルーツを検証した結果、現在実地臨床で汎用される「梵天種(白花八重)」と異なる複数の系統種を確認した。その中には森野藤助賽郭写真「松山本草(森野旧薬園蔵)」に描かれた赤花一重の品種も存在した。一方、近現代の薬用植物栽培関連記述の調査により、芍薬の栽培・加工方法及び薬用部位以外の活用について検証した。その結果、江戸期に経済性向上のために切り花として利用した記述が認められ、現代の栽培においても応用可能であることを確認した。また、江戸期には現在必須とされている摘蕾・摘花の記載が見られず、栽培方法の再検証の必要性を示唆した。